

## メリュジーヌ伝承から異類婚説話へ

—罪とあやまち—

篠田 知和基\*

### I メリュジーヌ伝承

フランスのポワティエ地方の豪族リュジニャン家の始祖伝承として<sup>1</sup>、蛇妖精メリュジーヌと騎士レモンダンとの婚姻と、禁忌背反による別離の物語がある。禁忌は土曜に姿を見ることで、見ると蛇になって水浴をしている。この話を一般化して異類と人間との別離で終わる婚姻の物語を日本では「メルシナ型」といい<sup>2</sup>、鶴女房 (Ikeda 413A) などがその代表とされる。

鶴女房の報恩モチーフは類話の狐女房などをみればなくともいいようにもみえるが<sup>3</sup>、一般に異類がやってくる動機は問われねばならない<sup>4</sup>。子どもができないのは始祖伝承ではないからで、蛇や狐のばあいはたいてい子供がいる。それでも鶴でも狐でもメリュジーヌとちがうのはかたや異類であり、かたや妖精であるという点である<sup>5</sup>。

そこで問題となるのはメリュジーヌの本性はなんなのか、妖精であるなら、妖精とはなにか、そしてそれは人間にたいしてどんなことをするものなのか、それはキリスト教から見ればいかなる存在なのかということである。そのまえにメリュジーヌタイプとみなしうる類話を整理してみる。日本では鶴女房の系列で狐、蛤、蛙、天人がある。また神話でトヨタマヒメがメリュジーヌに対応すると西欧の学者によっても指摘されている<sup>6</sup>。ほかにホムチワケが簸の川でまじわった蛇女神ヒナガヒメの物語もある。日本以外では高麗の高

祖作帝建の妃の話<sup>7</sup>、ビルマのクン・アイ説話がある<sup>8</sup>。ヨーロッパ、とくにフランスではジェルヴェ・ド・ティルビュリー<sup>9</sup>によって報告されているルーセの奥方や、ワルター・マップ (Gautier Map) による大歯のヘンノの話などがある。また妖精譚としてはランバル、グラエラン、ギンガモールなどがある。昔話ではAT400番、「鹿になった王女」などがある<sup>10</sup>。また、オセットのナルト神話に蛙姫の話がある。男女の別はあるがグリムに「蛙王子」(AT440) もある。

メリュジーヌ伝承としては1394年にかかれたジャン・ダラスの「いとも高貴なるリュジニャン家の物語」が現存しているものでは最も古いだが、メリュジーヌの10人の子供たちの波乱万丈の武勲などを延々と述べたもので、本来のメリュジーヌ伝承はそのなかのごく一部とみられる。そこでメリュジーヌとレモンダンの出会いと別離までのところのみ本来のメリュジーヌ伝承とする<sup>11</sup>。

### II-1 メリュジーヌの本性

メリュジーヌの本性はなんなのか。ジャン・ダラスは序文にあたるところで、ジェルヴェによればとして、リュタンとかフェというものがいて、ちいさなからだで、主として夜中にいたずらをしたり、あるいは家事のてつだいをしたりする。そして、ときにはそれが目のさめるような美人になってやってくることもあって、特定のときに姿をみようとしなにかぎり未ながく、しあわせにくらせるといっている。つまりメリュジーヌを妖精

\*甲南大学人間科学研究所客員研究員

(フェ)としている。

さらに本題にはいるまえにエリナス王と妖精プレシーヌの物語をかたる。プレシーヌは出産の場をのぞかないでくれといって王と一緒にいたが、三人の娘を生みおとすときにエリナス王がのぞいてみたために妖精界へもどってしまった。その三人の娘の一人がメリュジーヌである。(ほかの二人には異類性はない)。

それだけではなく、その娘たちがおおきくなったとき、父親はどこにいるのかとたずね、これこれしかじかと言ってやると、約束にそむいた父親は罰しなければならぬというので、メリュジーヌがおぼえたての魔法でエリナス王をノーザンバーランドの山のなかにとじこめてしまう。その魔法はプレシーヌにもとくことはできない<sup>12</sup>。

しかしプレシーヌはわかれてはきたがいまでも愛している夫をそんなにまでして罰するつもりはなかった。ひどいことをしてくれたというので、メリュジーヌにたいして、土曜ごとに蛇になるようにという呪いをかける<sup>13</sup>。そのうえ、そのことを秘密にして、土曜は姿をみないという約束で人間の男とむすばれるがいい、男はかならず約束をやぶって「見るな」という姿を見るだろう。そうやって愛したものに背かれる悲しみを知るがいいというのである。そしてメリュジーヌの物語がはじまる。

つまりジャン・ダラスの解釈ではメリュジーヌは、本来、人間の姿をしているが母親の呪いの結果、土曜だけは蛇のすがたにならなければならないのである。しかし物語の後段では、レモンダンが土曜にのぞいて、蛇の姿を見、そのことをまわりのものにつげるにいたってメリュジーヌはもはやこれまでと、竜になってとびさってゆく。メリュジーヌの本性は竜蛇だったことになる<sup>14</sup>。なお、先行話では、おおくのばあい、教会で聖水かけると竜になる。この「竜」とは悪魔とほとんど同義である。妖精譚のばあい妖精は動物態にはならず妖精界へ去ってゆく。メリュジーヌは悪魔

なのか、妖精なのか、女神なのか。

そもそもプレシーヌが出産の場をみないでくれといったのもなぜだったかといえば、トヨタマヒメが産のばあいは元つ国の姿になるといってワニのすがたで蠢いていたというように、異類あるいは妖精は出産の場で本性をあらわすのである。それがみられてはならない姿である以上、プレシーヌのばあいたとえば竜蛇であったかもしれない<sup>15</sup>。その娘のメリュジーヌは、魔法や変身にたけた妖精で、しかし本体は竜蛇の、つまり蛇妖精だったことになる。

## II-2 妖精とはなにか

ここでそもそも妖精とはなにかということになる。妖精とは人間と神とのあいだの存在で、ギリシャ神話ではニンフやドリュアデス、ネレイデスなどで、ネレイデスは海の妖精だから下半身は魚になっている<sup>16</sup>。神ではないので、人間の運命をかえることはできないが、魔法は使え、変身ができる。人間と一緒にくらしているときは、一種の福の神で、万事うまくいって富み栄える。しかし妖精にたいしてしかるべき敬意を払わず、約束をやぶるようなことがあれば、妖精は立ち去って、その家の運は傾く。日本の昔話の竜宮童子などは性格が似ている。鶴女房や狐女房も致富妖精といってもいい。天人女房も同じである。

キリスト教絶対主義からいえば妖精は古代の神々の生きのこりで、つまり異教の神格で、むしろ悪霊に属するが<sup>17</sup>、キリスト教の論理を離れば、人間にたいして害意をもったものではない。すがたかたちは変幻自在で、人間のすがたにもなるが、動植物としてあらわれることもある。あるいは動植物にやどるといってもいい。キリスト教論理では、洗礼をうけないために、天国へ行くことができずに宙にただよっていて、人間と結婚すれば人間になれ、洗礼をへて死んで、天国へゆくことができる。したがって妖精たちは人間との結

婚を願望しているが、異教の論理でいえば、妖精は人間より上の存在で、人間との結びつきへの願望はあまり見られない。その姿は変幻自在なので、とくに蛇妖精、魚妖精、鳥妖精などという必要はないようだが、妖精によっては蛇妖精ヴェーブルのように<sup>18</sup>、蛇の姿が本態で、変幻の術によって人間その他になることがあっても、元の姿に戻れば蛇であるという妖精もいる。メリュジーヌもそうで、人間の姿でいられなくなると竜にならざるをえない。

### II - 3 鶴女房ほか

日本の鶴女房、狐女房のばあいも恩恵をあたえる妖精とみなせる。その本体は鶴、あるいは狐で、機織りの時は鶴になり、安心して菊をみているようなときは尻尾があらわれる。男は狐でもいいからいてくれというが、狐は去る。のちには夫が子供をつれて信太の森へたずねてゆく。問題はなぜ鶴や狐、あるいは蛤や蛙が人里へやってきてひとりものの女房になるのかである。蛇や亀のばあい、子供たちにいじめられているのを放してやったなどという話があり、異類が報恩として竜宮へまねくのである。竜宮がでてくる話ではクン=アイヤ作帝建の話もある。竜宮へまねくのではなく、むこうから人里へやってくるばあい、その理由はあまり語られない。鶴女房のばあいは矢がささっていたなどという。

・異類とのであいの理由、異類側からの視点

異類を松前健のように神霊とみなすと、なぜやってくるのかわからないが、ひとつは秋田の「鳥のあねご」という話のように、産土の神がはたらきものの青年に目をとめて褒美として嫁になってくる<sup>19</sup>。あるいは竹取物語のように元つ国で、なんらかの罪をおかして流罪として地上にやってくる。もうひとつは鶴女房のばあいで、報恩であり、蛙女房のばあいは人間になりたいからであろう。対馬の峰村の蛇女房だと、人食いのために

やってくる。動機はさまざまである。しかし月世界で罪をおかしたという「竹取物語」のばあいが示唆的である。メリュジーヌのばあいも実は罪を犯して<sup>20</sup>、罪滅ぼしのために人間界へやってくるのである<sup>21</sup>。異類を神とし、人間界をかれらにとっては穢れの流罪地とするなら、そこへやってくるには罪があったのであろうし、人間と一緒にしたものは元つ国の論理では呪われたもの、あるいは墮落したものであろう。バスラのハッサンの物語だと、ハッサンと一緒にした白鳥妖精は、人間と一緒にした穢れたものとして天界でつまはじきされるのである。異類婚が人間側からではなく、異類の側からどうみられたかが大事である。

・鶴女房譚の分析

1・報恩モチーフは亀（竜宮譚）、蛇などにも共通し、日本独特のものである。ヨーロッパでは死者報恩（野ざらしの死骸を葬ってやる）のほか、喧嘩仲裁（あそびでいる動物の仲裁をする）。狐女房、蛤女房では報恩モチーフはメインではない。

2・いなくなった女房のあとを訪ねるモチーフはAT400に必須だが、日本の鶴女房ではすくない。甕島では鶴の島までゆくと裸の鶴がいる。埼玉では後をおってみると河原で裸で死んでいる。謎解き型では播磨の国皿池などへたずねてゆくと裸の鶴がいる。

3・鶴以外のばあい 島根では機を織る蛤のばあいがあり、これは、文献にもある。静岡では牛、長野では雉、山鳥など、ネズミもある。石川では鷹、ただし、鳥のばあいでも、機は織らない。

4・子供がうまれる例が岩手にある。

異類女房全体では、いくつかの例外はあるが、報恩は必須ではないとすると、発端はみしらぬ女の来訪で、その女が嫁になり、家が富み栄えるが、正体がわかって去る。機織りも必須ではない。天人女房のばあいは、そこにいるだけで子どもでき、家も裕福になる。異類のばあい、素性がわかると別離でおわるのがふつうで、後追いはすくなく、

子供がうまれる例もまれだが、天人女房では子供ができ、別れた女房をさがしに天までゆく<sup>22</sup>。この点がメリュージュとの違いになるが、ヨーロッパ型の400番では「いなくなった女をさがす」のがふつうである。

メリュージュのばあい、生まれた子がみな異常で、おおくは獣性をもっている<sup>23</sup>ことは、彼女の罪によるとみられる。人間と結婚するだけでは、贖罪はすまない。毎週の水浴も穢れからのみそぎともみられる。すくなくとも水浴の様子を夫に見られてはならないので、きわめて困難な試練（贖罪）といえる。

## II-4 鹿王女

別離のあとわかれた女のところへたずねてゆくというのは、メリュージュとその類話ではないが、AT400番の昔話「いなくなった女をさがす話」では、別れた女との再会のほうが重要になってくる。これがヨーロッパの異類婚説話の代表的なもので、白鹿、白猫などである。魔法で鹿になっていた王女と「おそろしい接吻」<sup>24</sup>その他の試練をへて魔法を解除して一緒になった主人公は、そのあと、一定期間は王女を見ないという約束をやぶって姿を見たために、王女をふたたび魔法使いにさらわれ、それをさがしににかけて艱難辛苦のはてに再会するのである。

日本では「天人女房」がこれにちかく、山の湖で水浴をしている天女を、とび衣を隠してとらえ、女房にするが、天女はとび衣を見つけ、天にさってゆく。そのあと天までおいかけいて天の舅に各種の難題を課され、最後の難題で失敗して地上にもどされる。この最後をのぞいて、天での難題は、400番や313番のフランスの物語ではガラス山の悪魔の城での試練など<sup>25</sup>、日本の天人女房と共通する。

フランスの物語のヒロインは魔法にかけられていた王女で、魔法がとければ、異類から人間にも

どる。日本の異類婚説話では異類が自身の意志で人間になって通婚する。「鼠の草紙」では、長者の娘に懸想した鼠が人間になって婚姻する。あとで化けの皮がはげて破たんする。狐女房も好んで嫁になってくるか、たまたま野原で男にであって意気投合したからか、人間の姿で婚姻した。しかし人間の嫁になったものをもとの仲間の動物たちはどうみていたかが問題である。生物学的に言えば人間界でくらしていたものは、自然界へもどってもはやうけいられない。最初から、動物界で村八分になって人間界へやってきたのかもしれない。竹取物語のヒロインがそうである。月世界で罪をおかしたのである。

## II-5 中世妖精譚（騎士と妖精）

### ギンガモール

王妃に言いよられたのを斥ける。王妃は仕返しに白イノシシを取ってくることを命ずる。白イノシシを追って行って水浴びをしている妖精に出会い、衣を隠して情をかけてもらう。ついで彼は妖精の世界へ招かれる。そこからこの世へ戻るとき、なにも食べてはいけないという禁忌を課されるがそれに背くと馬からおちて死ぬ。

### ランヴァル

水浴している妖精に会い、情を交わす。秘密を誰にも言わない限り、妖精はいつでも願えばやってくる。しかし王妃が言いやり、斥けられるとランヴァルは裁きの場で王妃より美しい妖精をよびださなければならない。妖精はやむをえずにやってくるがすぐにたちさろうとする。ランヴァルはその馬の尻にとびのって妖精の国へゆく。

### グラエラン

王妃に言いよられ、斥ける。宮廷で村八分になる。森で白鹿をおう。水浴している妖精に会う。彼らの関係を秘密にすることを条件に妖精は愛を許す。最後は妖精界へ。

これらの妖精譚では妖精のほうが、王妃もふく

め、地上の女より美しい。また、妖精界はとくに明言はされないが、常春の楽園とみられる。妖精界にとどまれば幸せで、地上にもどるとたいてい死んでしまう。また地上での妖精との愛は時とところと状況にかぎりがあり、いつでも、どこでも、永遠に、ではない。永遠のきずなは妖精界へいかなければならない。そして妖精界へゆくことは地上の論理では死ぬことである。

### Ⅲ-1 蛇女房・食わず女房（妖怪女房）妖狐 悪意のある妖怪

異類の配偶者には悪意のある妖怪もいる。これは日本でもヨーロッパでも同じである。ただし、解釈の問題で、捨てられた女が男においすがさまを蛇や鬼のようにみるときに、哀れな泣きぬれた女とみるばあいがある。

「道成寺」 女が男をおいかけて川をわたるとき（走っているうち）龍蛇になる。

「蛇性の淫」 蛇妖が美女になって男を誘う。高僧の折伏によって正体をあらわす。

白蛇伝 同 これも、上の物語もどちらも女の側にたつてよめば、一途に恋着する女である。妖狐譚（殺生石） 美女が素性をあばかれ逃げ出すが、那須野で仕留められる。

レイミア 蛇女が美女にばけて男と結婚するが素性をあばかれて別れる。

「恋する悪魔」 カゾットの小説 悪魔が子犬、ついで美女の姿で男を誘惑する。性愛のさ中に本性を表す<sup>26</sup>。

動機が悪意を含むものでは、対馬の峰村の昔話の蛇女房は人食い蛇で、男を食おうとしてやってきている。食わず女房の山姥も同じである。蛇女房でも蛇の目玉型では、悪意はない。400番の昔話と日本の異類婚説話の違いは魔法の有無だろう。メリュジーヌは善意の妖精だが、魔法が使え、それによって罪をおかす。日本で妖精に近いのは

竜宮の乙姫で、本体が竜であったために別離にいたるといふことではメリュジーヌと似た経緯をたどっている。ただしアルフ＝ランクネールの分類では、竜宮へいってであっている点でモルガン型になり、メリュジーヌは妖精がこの世にやってきて、こちら側であっているのが異なる。

こちら側であつた存在が人間を超えた存在で、その本体が蛇であることがわかって破たんするのは、男女のちがいはあるが三輪山説話で、夜ごと通ってくる男に、素性が神であるといふので、その本体をみせるようにいふと、蛇になっていた。そのときおどろいて叫び声をあげたので、神は「我にはじみせつ」といって飛び去つた。これは本体が蛇であること、見てもおそれるなという警告に反しておどろいて叫びごえをあげて別離にいたること、空中をとびさる蛇であることなどで、メリュジーヌとの共通性がおおきい。善神で、変身は神の自在性により、魔法（邪法）はない。

### Ⅲ-2 日本の異類婚 殺される配偶者

悪意はないが、嫌悪の対象。

猿婿 里帰りの日に谷川におちて死ぬ。

蛇婿 嫁入りの日に瓢箪をしずめようとして死ぬ。

馬娘婚姻譚 娘にほれた馬が手柄をたてるが、娘を要求して殺される。

このタイプで殺されないのは犬婿くらいである。しかしこれも離れ小島にたどりついて子を産んで一族を形成したあと、息子に誤って殺される話がある。異類婚は人間界にはうけいられないのだ。異類婚にははいらないが、三輪山説話では蛇神がともにくらせないと言つてとびさつてゆく。このばあいは神だが、人間界にはいられないのである。ほかは西欧流にいえば悪魔である。鬼婿、河童婿などもその類だろう。鼠草紙でも、男が鼠であることがわかると女は逃げ出してゆく。悪魔とまでは言わなくとも、一緒にくらせる相手としては認められないのだ。

フランスの433番の蛇息子では蛇が花嫁をつぎつぎに食い殺す。

### Ⅲ-3 メリュージヌの先行話（悪意のある妖精・悪霊）

アルフ＝ランクネールによるシェーマは以下のとおりである。

1 出会い、一人で森の奥へゆき泉のほとりで妖精にあう。

2 契約、結婚の条件で、禁止条項をだす。しばらくは幸福。

3 禁忌背反、第三者のそそのかしで、禁忌をおかす。妖精の本性（異類）がわかる。妖精は立ち去る。子供が残される。男は没落する。

1 大齒のヘンノ G.Map<sup>27</sup>

森で泣きぬれた女にあい、結婚する。ミサを途中でぬけだす。

聖水をふりかけると逃げ去る。本態は竜。「逃げ去る女」「見送る男」。

2 エドリック 同上。

森の妖精の館で妖精にであい、結婚する。館や仲間のことをきいてはいけない。

約束をやぶり、妖精はたちさり、エドリックは死ぬ。

3 ワスティヌス 同上。

水の妖精。馬の轡でたたかないこと。本性（水馬）の秘匿。子供をつれて去る。

4 シチリアの水精 Geoffroi d'Auxerre<sup>28</sup>

海でおよいでいて妖精をつかまえる。しかし妖精は口をきかない。子供が生まれ、口をきかなければ子供を殺すという、立ち去る。子供は海岸であそんでいるときに妖精にさらわれる。「口をきかぬ女」（言葉が通じない女）で、異国の女とのエグゾガミーを思わせる。

5 メリディアナ Gautier Map

恋人をあやつって教皇にまでし、洗聖をさせる。蛇性であったかどうかは不明<sup>29</sup>。

6 死女の子 ib.

さみしい谷間で死者たちのなかに亡妻を見、つれさってしあわせにくらす。

7 ラングルの女 Geoffroi d'Auxerre

森でであう。水浴をみないこと。蛇になっている。大勢の子どもを残して去る。

8 ルーセの奥方 Gervais de Tilbury<sup>30</sup>

裸体をみてはいけないというタブーを犯すと、女は蛇になって去る。

いずれもキリスト教の論理から語られ、魔性の蛇とされる。が、悪意のない妖精で、男のほうが禁忌をまもれなかったために別れる物語とも読める。

### Ⅳ インド・ヨーロッパの類話

ナルト神話でヘミッツは海底の世界から蛙娘をつれてくる。人にののしられてはいけない。集会につれていってののしられ、海底へ帰る。そのまえに腹の子をヘミッツの肩にうえつけてゆく<sup>31</sup>。これがパトラスである。インド神話で、シャンタヌ王はガンガー女神のすることに異をと立てはならなかった。うまれてくる子供を川に投ずるのをみて止めようとすると、それまでと言って去ってゆく。この物語ではガンガーは美しい女としてあらわれるが、鰐のつた姿であらわされることもあり、鰐女神ともみられる<sup>32</sup>。

ユーラシアからはなれるがハイチには蛇婿の話が多数報告されている。コムエアは、これを悪意のあるもの、善意のものとわける<sup>33</sup>。初めから女が蛇を退治する話はずくない。村の男たちとの婚姻を嫌っていた傲慢な女が見知らぬ男の求婚を受け入れるが、男は蛇で、女を森へつれこんで食べてしまう<sup>34</sup>。

### 結論

異類との婚姻は人間中心の世界観（キリスト教

論理)では悪魔の誘惑で、異類は悪意をもってちかづき、結果は食い殺されたり、地獄へさらわれたりする。

非キリスト教論理では、しあわせな婚姻になるばあいと、悪意をもった異類を成敗するばあいがあるが、しあわせなばあいも長続きはしない。禁忌背反によって婚姻は破たんする。異類が超越的存在であっても同じである。(天人女房、三輪山、ガンガーほか)

日本では異類の配偶者を成敗するばあい、異類のほうに悪意があるとはかぎらない。(猿婿、蛇婿)。異類であるだけで嫌悪される。女は「殺す女」である。異類の側からいえば、罪もないのに殺される。昔の日本では異類(動物)と人間との境があいまいで、双方があいまいに共生していたようにいわれるが、いざ婚姻となると異類婚あるいは外人との結婚は許されていなかった。これは被差別民との婚姻でも同じだった。

異類・超越的存在は人間と通婚して人間界にとどまることは許されない。異類の世界で罪をおかして追放されたときでも、贖罪の期間がおわればもとの世界へつれもどされる。

異類との婚姻が永続するためには、異類が人間にならなければならない。(田螺、蛙)。そのばあい、日本では下駄でふみつぶされる、壁へなげつけられる、刀で切られるといった暴力的加害が必要<sup>35</sup>。これはヨーロッパの人狼の変身解除とも通ずる。異類性を暴力的に解除・除去するのである。

ヨーロッパでは異類になっていた王女の魔法を「恐ろしい接吻」で解除するが、その後、いなくなった王女をとりもどす試練をへて、幸せな婚姻に至る。メリュジーヌについても、別離のその後の想像が可能である。去ってゆく女を見送るだけというのは日本的で、フランスの男は別れた女に追いつがる。「メリュジーヌ物語」では、メリュジーヌはおさない子供への授乳にもどってくるほか、リュジニャン家に危難がせまると城の上に来てきて警告の叫び声をあげる。しかし、400

番話などと同じなら、レモンダンが妖精の世界へメリュジーヌをさがしにでかけるのである。

松前は異類婚を神霊と司祭者との関係とする<sup>36</sup>。蛇は豊穡神である。女神であれば子を生み、一族の始祖となる。そのさいに見るなの禁が課される。蛇体は神の御子のミアレの秘儀の扮装とみる。ヨーロッパでは蛇女神のほか、子のない女が神にいのって蛇息子をさずかる話がある。申し子だが、神性をもっていて、しかるべき作法で仕えなければならぬ。7人の嫁は神への敬意を欠いて食い殺される。8人目がただしく神としてまつってしあわせな婚姻に至る<sup>37</sup>。

鹿王女は魔法使いの魔法で鹿になっている<sup>38</sup>。メリュジーヌは母親の呪いで蛇になる。双方とも発端に「罪」があり、罰として疎外態をあたえられる。日本の異類婚でも夫の立場ではよくはたらくことへの報償であったり、傷の手当の報恩であったりするが、異類の側からみれば竹取物語のばあいのように女のほうに罪があり、その罪滅ぼしにやってくる。異類の仲間から一匹だけはなれて人間界にくるということはなんらかの罪業のためとみるのが自然である。人間界は異類にとってはおそろしいところのはずである。異類女房の到来は、異類の仲間からの疎外にあたる。人間中心ではなく、異類の側からの読みをすれば、人間界にとどまることはおそろしい罰である。

罪をおかして人間界におとされた異類(妖精)は、贖罪をおえて帰国する。これが、禁忌背反による別離である。とどめるにはタニシ息子のばあいのような暴力的加害が必要である。

フランスの妖精物語は妖精界から見た物語。メリュジーヌ物語は罪をあがなう妖精の物語。それと比較して日本の異類婚説話には罪や悪の問題が希薄なようにみえるが、蛇婿ごろし、人食い蛇女房など、けっして罪や悪が欠落してはいない。むしろ「いなくなった女をさがす話」の日本版である「天人女房」の不幸な結末をみると、日本のほうが倫理的にも悲観的なようにみられる<sup>39</sup>。「鶴

女房」でもあとを追った例では赤裸で死んだ鶴を発見したりする。そこで、のがれられない人間の罪障に直面させられるとしたら、その教訓は重い。

## 注

- 1 リュジニャン家は実在した。キプロス王をだしたともいうが、これは実力ではなく、ギ・ド・リュジニャンという十字軍士が、やもめのエルサレム女王にとりいったおかげである。ポワトゥの直系はとだえたが、支脈は現在でも健在。
- 2 松前健「豊玉姫の産屋とメルシナ型説話」、著作集9。
- 3 狐女房でも報恩型のほうがおおいともみられる。関116Aの例話ほか。狩りで逃がしてもらおう。
- 4 見知らぬ女がやってきて嫁にしてくれという。そのとき素性や動機はといつめない。しかし、自然の動物であれば、動物の仲間をすてて人間界にやってくるにはそれなりの動機が必要である。これを動物界からみれば「放れもの」であり、わけあって仲間をさってゆくものである。異類女房をうけいれるほうでは結構なこととして、ふかく詮議をしないが、異類の方では、かぐや姫のように「元つ国」にいられなかった事情として、なんらかの「罪」が想定される。
- 5 これについては後述するが、鶴女房や狐女房をたんに「異類」として、ただの動物であるとするのは問題であろう。変身ができ、言語を解するのである。であれば、それは鶴妖精であり、狐妖精である。あるいは妖狐である。
- 6 メリュジーヌ型の日本神話では、おなじく蛇女であるヒナガヒメの話もある。これについてはアルフ＝ランクネールら、西欧の研究者は言及していないが、以下のような話である。簸の川の神怪ヒナガヒメはホムチワケと一夜婚をした。朝になって大蛇であることがわかり王子は逃げ出す。蛇は王子をおいかける。
- 7 作帝建は竜宮へ招かれ、怪物退治をした。その報償として竜王の娘をもらう。しかし妃は宮殿の隅の井戸から竜宮へたびたび通っていた。あるときそれをみられて破局にいたる。
- 8 三品彰英、神話と文化史、三品彰英論文集、平凡社、1978 ミャンマーの始祖伝承。湖の龍女が湖畔の牧童を竜宮へ招くが、祭りの日にみるなという外をみると無数の龍がひしめいていて恐れ、地上へ帰る。龍女は岸辺に金の葉でつつんだ卵をうんでゆく。
- 9 ガーヴェーズ・オヴ・ティルブリー1150-1228とも。
- 10 ATやATUでは「いなくなった妻をさがす男」だが、フランスのTenèze-Delarueでは401をたてて鹿や山羊になった王女を解放する話にする。
- 11 ほかにクードレットの韻文物語があるが、物語の順序がすこしがいい、エリナス王とプレシーヌの物語があとにうつされたりしているほかはほとんど同じである。
- 12 妖精ヴィヴィエンヌがメルランから魔法をまなんで、それによってメルランを湖底のガラスの城にとじこめたことが思い出される。
- 13 蛇になるのは下半身だけである。それについてハイネが、フランス人は幸せだ。なにしろ女が半分しか蛇でないからだと言ったという。
- 14 一般には下半身が蛇で、二本の足のかわりに一本の蛇の尻尾になっていると想像されるが、二本の蛇の尻尾がからまっているばあい、大股開きになっているばあい、そして蛇ではなく、魚の尾びれでおわっているばあいがある。ただし、魚尾のばあいは「人魚」で、蛇妖精メリュジーヌではないとされる。
- 15 日本の狐女房でも出産の場をみないでくれという話がある（関、116A例話）。
- 16 これら古代の「精霊」たちにはバーンやファウヌスもはいるが、そのなかにはハルピュイアのような害悪をなす精霊もいる。これと区別するべきは中世の想像における「四大元素」の霊で、空気の精シルフィード、水の精オンディーヌ、火の精サラマンドル、地の精グノームなどである。あるいは北欧やゲルマン神話の小人や諸霊がいる。これにオリエントのペリなどもあって、どの時代のどの文化圏のものかみわける必要がある。
- 17 アルフ＝ランクネールがメリュジーヌの先行話として「死女の子」をあげているのが示唆的である。妖精は洗礼をうけずに死んだ女ともされるのである。
- 18 20世紀の作家マルセル・エーメに蛇女王「ヴイーヴル」という小説がある。
- 19 褒美というより、目をかけた、気にいったとしたほうがいいかもしれない。鳥としても男との通婚を欲していたのである。河原に牛馬の死体がすてられると飛んで行って腐肉をついばむのも、欲望のせいである。産土の神といっても人間とおなじような欲望や欲求がある。
- 20 父親をノーザンバーランドの山の中にとじこめたのが彼女の「罪」である。
- 21 日本でもヨーロッパでも、罪ないし穢れ、あるいは怪我が発端にある。それは男のほうにもある。レモンダンが王を殺してしまう。日本の異類婚の亭主はたいがい貧しく、その日暮らしである。美



- しい女がやってきても、とてもつりあわないといって断る。婚姻資格の欠如である。天人などの側からみれば、貧しい男と一緒に汚い小屋に住むことは「穢れ」にあたる。メリュジーヌは父親を山にとじこめるという罪をおかした。かぐや姫はなにかの罪を犯して、地上へ流された。天人女房も衣を失うという失錯をおかした。天界では、大事なとび衣をなくしたことは重大な過ちであろう。鶴が狩りで矢を射られて、けがをしたのも完璧な状態からの欠損状況にあたる。鶴の仲間からは見捨てられたのである。
- 22 天稚彦物語だといなくなった夫をさがして女が天へのぼってゆく。
- 23 ジョフロアが猪の牙をもっているように、ライオンの爪が頬からでていたり、モグラのような鼻面をしていたりする。
- 24 「勇敢な接吻」とも。大蛇や醜怪な蛙、あるいは腐乱した死体などとする接吻で、これによって魔法をとき、変身を解除する。
- 25 AT313（フランスでは「悪魔の娘」）における難題がこのモチーフの典型。
- 26 J. Cazotto, *le diable amoureux*, Champion, 2003
- 27 Gautier Map, *De Nugis Curialium*, The Clarendon Press, 1914
- 28 Geoffroi D'Auxerre, *Super Apocalypsim*, Edizioni di Storia et Letteratura, 1970
- 29 この魔性の女が課した条件はほかの女と関係をもたないことというもので、これはだれであっても要求することだろう。本当の条件は「エルサレム」の教会でミサを上げることで、信仰をもたずに聖地の教会でミサをあげればおおきな罪になるだろう。その予言はローマの「エルサレム教会」で実現し、教皇は罪を自覚し、公の告解をおこなう。これによってメリディアナとの関係は切れ、別離になるのだろうが、禁忌違反によって妖精との関係が断絶するという筋書きではない。冒涇のミサによって断ち切れるのは教皇としての立身出世であろう。
- 30 Gervais de Tilbury, *le Livre des merveilles*, Les Belles lettres, 1992
- 31 G. Dumézil, *Le Livre des héros*, Gallimard, 1965
- 32 この話とアプサラスのウルワシの話、それにバトラスの母親の話をもってきて、ミャンマーのクン＝アイ説話、朝鮮の作帝建の神話とならべれば、フランスから日本まで同一の説話がつらなる。
- 33 Suzanne Comehaire-Sylvain, *les Contes haitiens*, Thèse Sorbonne, 1937
- 34 ハイチのばあいの動物種はほとんど蛇だが、間宮史子の「ドイツ語圏の異類婚姻譚」『昔話の成

立と展開』1991は、異類婚姻譚の動物種を分類し、食べられるもの、愛玩動物、野生動物などとわけ、異類嫁になるのは愛玩動物がおおいとしているが、論文中の表では嫁としておおいのは猫12、白鳥9、蛙と蛇がそれぞれ7、鹿が4などで、猫以外は愛玩動物とはいえない。婿のほうは熊9、狼7、蛇7でほとんど野生動物である。両方を合計すると蛇が一番おおい。ちなみに狐は0である。

- 35 ヨーロッパの蛙王子も壁へたたきつけられて人間になる。
- 36 異類を「まれびと」の訪れとみる。神霊ではあっても精霊や祖霊にちかい存在で、高天原神族などではない。オリュンポス神族のばあいは動物態をとって地上の人間とまじわる神々がおおい。蛇になってオリュンピアとまじわってアレクサンドロスをうませたゼウスなどである。この動物変身をともなった神婚は異類婚物語の検討からは除外されてきたが、蛇婿、白鳥婿、牛婿などと同列に考えることもできるはずである。
- 37 AT433, 蛇王子
- 38 401番のフランスの例話では「妖精のことを聞かなかったために、王女が山羊になって、城にとじこめられた」と語る。
- 39 ヨーロッパでは異類にかけられた魔法を解除して婚姻する。あるいは逃げ去った相手を艱難辛苦のはてにみつけだして結婚しなおす。これを異国のものとの困難な婚姻の物語とみると、探索にしても、同化にしても、双方の努力が幸せな婚姻の条件になっている。魔法も日本にはない地域的特殊文化と見る必要はない。異類を魔法にかけられた人間であると見ることは、魔法を解除すればふつうに婚姻することができる相手であるという認識で、異国のものでも、言語、風習などを学び、その社会に同化すれば婚姻相手になりうるということである。日本ではその点、異類が同類になる方法が化け狐のそれ以外知られていない。

#### 参考文献

- Laurence Harf-Lancner, *la fée au moyen âge*, Champion, 1984
- Jean d'Arras, *Mélusine, roman du XIVe siècle*, ed. Louis Stouff, publication de l'université de Dijon, 1932
- Coudrette, *Le roman de Mélusine ou l'Histoire des Lusignan*, Klincksieck, 1982
- Lais féeriques anonymes des XIIIe et XIIIe siècles, Flammarion, 1992
- Lais de Marie de France, LGF, 1990
- Gallais, Pierre, *La fée à la fontaine et à l'arbre*, Cermeil, 1992
- Lecouteux, Claude, *Mélusine et le chevalier au Cygne*,

- Imago, 1997  
Le Goff, Jacques, Pour un Autre Moyen Age, Gallimard, 1977  
Chiwaki Shinoda Melusine et Toyotamahime, diffusion  
maritime d'une culture, Diogenes, 218, 2007  
クードレット 妖精メリュジーヌ物語、松村剛訳、  
講談社、2010  
松前健著作集 9、おうふう、1998  
関敬吾著作集 4、同朋舎、1980  
関敬吾 日本昔話大成 2、角川書店、1978  
稲田浩二 日本昔話通観 28、同朋舎、1988  
篠田知和基 メリュジーヌ伝承の東西、説話・伝承  
学 17号、2009  
同 異類婚説話の比較、名古屋大学文学部研究論集、  
109、1991